



TITLE:

22 ヘビの写真がニホンザルの視覚的注意に及ぼす影響について(X.共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

柴崎, 全弘

CITATION:

柴崎, 全弘. 22 ヘビの写真がニホンザルの視覚的注意に及ぼす影響について(X.共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 2008, 38: 102-102

ISSUE DATE:

2008-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166516>

RIGHT:

渡辺創太, 藤田和生 (京都大・院・文学)

社会的動物にとって特別な意味を持つ顔刺激を用いて、ニホンザル乳児 (2-4 ヶ月児, 平均月齢 3.3 ヶ月) が無教示状態で顔のパーツ (目・鼻・口) の大きさを判断する際、枠 (顔の輪郭) の影響を受ける (相対判断) のか受けない (絶対判断) のかを分析した。実験は慣化法を用いておこなった。実験補助者に抱かれた子ザルが、前面に設置されたモニターに映し出される 2 つの記号的サル顔刺激を見た。刺激は、4 回目の呈示時に、顔のパーツ (目・鼻・口) 以外が拡大されるか、顔全体が拡大されるかした。これらの刺激呈示時にいずれの刺激をより注視するかをビデオカメラを用いて記録し、それを解析した。なお、被験体 7 個体には顔刺激を呈示し、残り 6 個体には統制条件として顔のパーツをランダムに配置した刺激を同様の手続きで呈示した。結果、全ての刺激に対する平均注視時間が非常に短く、全体を通して特徴的な反応傾向は確認できなかった。また、初発の注視方向にも両刺激間で差は見られなかった。用いた刺激が、グレースケールによる実験者手描きのサル顔であったことから、実際に被験体が普段目に見ているニホンザルの大人顔との乖離が大きかったのではないかと考えられる。被験体達が普段接していないニホンザルの大人顔を CG 処理した刺激を用いての再実験を検討している。

21 左右大脳半球皮質の機能分化の起源を探る

伊藤和夫 (岐阜大・院・医)

ヒトの大脳皮質では、左右半球で異なる機能分化がみられる。たとえば、頭頂葉では右側の損傷の場合のみ半側空間無視が出現する。この機能分化は、霊長類においてヒトへの系統発生途上において出現すると考えられる。大脳皮質の左右差は、ヒト以外の霊長類では報告されていない。私たちは、ヒトの頭頂連合野と相同な皮質であるニホンザルの 5 野と 7 野において、同側性と対側性の線維連絡に左右差が存在するか否か検討した。

3 頭のニホンザルの 5 野と 7 野に神経トレーサーを微量注入した。その結果、視床では、前視床枕核に同側性の投射がみられた。外側中心核では、やはり同側性に逆行性に標識された神経細胞と順行性に標識された神経終末が観察された。内側中心核では、左右半球皮質いずれの注入例においても、両側性に神経細胞と終末が標識されていた。皮質では、両側の帯状回皮質 (23 野) において、標識された神経細胞と終末が見いだされた。両側性に線維連絡がみられた部位において、左右差が認められるか否か、統計学的に検討中である。

22 ヘビの写真がニホンザルの視覚的注意に及ぼす影響について

柴崎全弘 (名古屋大・院・情報科学)

これまでに行われてきたヒトを対象にした研究から、ヒトはヘビのように我々の進化の歴史において危険であった対象へ恐怖を示す傾向を持っていることが明らかにされてきた。近年の視覚探索課題を用いた研究では、ヒトは花の画像よりもヘビ・クモの画像をはやく検出できることが示されている。しかし、この結果にはヒトのヘビに対する生得的な恐怖だけでなく、経験的に獲得された恐怖や嫌悪も影響している可能性が考えら

れる。そこで本実験ではヘビに対する生得的な恐怖の効果を検討するために、実験室で育てられ、ヘビを一度も見たことのないサルを被験体として視覚探索の実験を行なった。

訓練では、ヘビのカラー写真 9 枚と花のカラー写真 9 枚を使用した。タッチパネルモニター上に呈示される写真のマトリックスは、ターゲット 1 枚とディストラクター (3 か 8 枚) で構成されており、花の写真の中にヘビの写真がある場合と、その逆の場合とがあった。訓練は 1 日 60 試行であった。正答率 80% 以上の日が 3 日連続するまで訓練を続け、その翌日からのデータを分析の対象とした。

その結果、3 頭とも花よりもヘビを発見するほうがはやくなった。ヘビに対してナイーブなサルでもヘビの視覚探索が効率的に行われたことから、ヒトとサルでみられるこの性質は生得的であることが示唆された。

24 健常児と自閉症児における視線・表情の情報処理過程とその相互作用

魚野翔太 (京都大・院・教育)

自閉症スペクトラム障害 (ASD) では共同注意の障害が報告されているが、実験場面では視線方向への自動的な注意シフトが生じることが示されている。本研究では、視線に情動的な表情が組み合わせられた場合、健常群と同様に注意シフトが促進されるかどうかを調べた。動情的な恐怖表情および中性表情の視線が呈示され、参加者は視線と一致した方向もしくは逆方向に呈示されるターゲットを検出するように求められた。健常群では恐怖表情の視線手がかりの効果 (逆条件—一致条件の反応時間) が中性表情よりも大きくなったが、ASD 群では差は見られなかった。この結果は、情動的な視線の処理に障害があることで、より複雑な現実場面では視線コミュニケーションの障害が顕著に現れるということを示唆している。背景にある神経基盤を明らかにするために同様のパラダイムで健常成人での予備的な実験を行ったところ、顔選択的に惹起する N170 において表情条件間の差が生じることが示された。今後、ASD 群において行動と対応した脳活動の障害が見られるかどうかを検討する予定である。

25 金華山のニホンザルによる種子散布:おもに散布後の定着・発芽について

笹岡直子 (東京大・院・農学生命)

霊長類が果実類の種子散布に重要な役割を果たしており、ニホンザルでも研究事例が集まりつつあるが、サルの追跡がし易く、糞の回収がし易い場所での情報は重要である。そこで本研究は宮城県金華山島に生息するニホンザルを対象に、ニホンザルがよく利用するベリー類の糞への出現を明らかにすることを目的とした。

本年度は、金華山でサルの糞中へのベリー類の出現について、島の北西部に生息する群れを対象とし、調査した。糞の採集はサルによってベリー類がよく利用される夏から秋 (8 月~12 月) に行った。8 月はクマヤナギ、9 月はサンカクヅル、10 月はガマズミとカマツカ、11 月、12 月は両月ともガマズミとノイバラの種子が糞の中に多く排出された。これらのうち、クマヤナギやガマズミは破壊されたものもあったが、糞中にも多数出現した